

第四表 IQとスキップの関係

年令	性	優		中の上		中		中の下		劣	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
6						1	1				1
5.6		1		2	2	3	9	1	6		1
5				1	1	2	5	3	6	1	
4.6			1	2		1			1		
4											
4			1								
3.6											
3											
2.6		1	2	5	4	7	17	4	13	1	2
計											

合計 116人

年令	性	優		中の上		中		中の下		劣	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
6								2		1	
5.6						4	2	1		1	
5				1	1	4	4	2	3		1
4.6			1	4	1	1	1	1			
4				1	1	4	1	1			
4			1	1	1	1	1	1			
3.6				3	1	1	2	1	1		
3				1		1		1			
2.6				1	1						
計		0	2	10	5	17	11	8	4	2	1

中で石けりなわとび、片足跳びの鬼ごっこなどをなるべくさせて左右の片足跳びの開きを少くする様に指導したら良いのではないかと考えている。

(八) 残された今後の問題 IQとスキップの関係を知る為に精神薄弱児施設でも同様調査を行ったが正常児には見られない様な又名前のつけようもない様な型が見られた。聾盲啞児達にも同様の調査を行って見たいと思っている。あらゆる方面からスキップと云うも

のを眺めてみたならばスキップの発達段階が自然と現われてくるのではないかと思いますので今後とも此の様な研究を続けて行きたいと思つてゐる。又指導法についても其の実際をしたと思つてゐる。

幼児の質問と保育課程の構成

埼玉大学

野間 郁夫

一、質問調査の目的および方法

幼児の質問を知ること、彼らの興味、関心の対象、方向を探る一つの大きな手掛りを与えるものである。よつて幼児の質問を調査し、以て保育課程の構成に資せしめようとするのが本調査の目的である。

本調査は埼玉大学附属幼稚園児四三名および三一名計七四名について、それぞれ二ヶ年づつ継続して行つた。幼稚のIQ平均は二二〇・九(新乙式団体知能検査)である。父兄の職業は会社員、公務員、教員等所謂サラリーマンが七四%、医師、画家などの自由業一六%、商業が一〇%であり、概ね市街住宅地に居住している。

調査の方法は家庭における幼児の自発的な質問を父兄が随時渡してある手帳に記入するという方法で、趣旨および方法については事前に指導した。結果として、熱心に書いた父兄と然らざるものがあり、記入漏れの質問も多数あると思つたが、総数を増すことによつてその欠陥は補いうると考え、ここでは総数を問題とした。調査は

資料5 人体(自然)

生理	41 (31.3) %	新代 陳謝	知覚	神経	呼吸	筋運動	消化吸収	循環
		13	7	6	5	5	4	1
形態	39 (29.8)	(組織)		(器管)		資料6 保健,衛生(自然)		
		(15)		(24)				
成長	24 (18.3)	成長		死				
死		5		19				
生殖	17 (13.0)	生殖		性				
性		15		2				
進化	8 (6.1)	進化		起源				
起源		2		6				
その他	2 (1.5)							
計	131							
						類別	質問数	
						疾病,傷害及原因	20	
						治療,看護,薬品	19	
						病气予防,鍛練	22	
						栄養	8	
						計	69	

資料8 自然に関する質問

項目	質問数	同%
天象	105	9.2
地象	79	7.0
気象	149	13.1
物理現象	88	7.7
機械・器具	140	12.3
化学現象	37	3.3
植物	84	7.4
動物	255	22.4
人体	131	11.5
保健・衛生	1137	6.1
計	1137	100

資料7 社会生活に関する質問

項目	質問数	同%
皇室	5	2.2
政治	42	18.9
交通	29	13.1
通信	18	8.1
災害	14	6.3
職業	8	3.6
経済	4	1.8
地理	31	14.0
歴史	5	12.2
年中行事	44	19.8
道徳・習慣	11	5.0
その他	11	5.0
計	222	100

資料1 幼児の質問の分類

領域	質問数	同%
自然	1137	59.09%
言語	236	12.27%
家庭	228	11.85%
社会	222	11.54%
非実在物	52	2.70%
数量・時間	24	1.25%
その他	25	1.30%
計	1924	100

資料2 非実在物に関する質問

項目	質問数	同%
神仏・靈魂	13	25.0
物語・伝説	36	69.2
化物・幽霊	3	5.8
計	52	100

資料3 家庭生活に関する質問

項目	質問数	同%
食品	89	39.0
被服	38	16.7
住居、水道、 庭用器	35	15.3
日用品	48	21.1
婚姻、 親族関係	16	7.0
その他	2	0.9
計	228	100

資料4 数量に関する質問

項目	質問数	同%
数量	9	37.5
時間・時刻	15	62.5
計	24	100

三ヶ年継続して実施されたから季節、年度等による質問の偶然性は比較的避けられていると思う。総数はこれによって断定的結論を下すに十分とは考えないからここには研究の方向と質問の大体の傾向の一端を示し、なお今後の研究に俟ちたいと思う。

二、調査結果の考察と保育課程構成上の問題

質問の分類に当っては保育課程の構成に役立たしめる観点から質問の対象たる事物と、幼児の質問する動機、態度に重点をおいた。全体の質問の傾向(資料1)は自然に関する質問(内容は資料8)が最も多く五九%を示す。これと対蹠的な非実在物(資料2)に関する質問が少いことはデヴィスなどの研究と一致している。

言語に関する質問は単純なことばの意味をたずねるもので、これには記入もれのものも多いと考えられるから全体における位置はもっと高く、これは幼稚園教育における言語指導の問題と関連してくる。

家庭生活(資料3)に関する質問中、ミシン、ラジオ、電燈等は自然の機械、器具の項に分類してある。家庭における人間関係に関する質問は婚姻に関するもの位で全体からいえば少く、むしろ家庭にあるものについての質問が殆どである。その中でも食品の質問が多く三九%を示すが、注意すべきことはその中の約三割は菓子、飲料の如き嗜好品に関する質問である。これは保健、衛生に関する質問(資料6)で栄養に関する質問が少いことと関連して保健指導上考慮すべき問題を提示する。

社会生活(資料7)に関しては、正月、節句、盆、七夕等や記念日、週間などの所謂年中行事に関する質問が政治に関する質問ともにも多く、次いで地理および交通となっている。政治の中、戦争、放射能、原爆、黄変米などのなまなましい時事問題に関するものがその六割以上を示していることは、幼児と雖もマスコミコミュニケーションの発達した現代にあつては、国の政治、世界の動きがちかに身に迫って感ぜられることを物語るものであり、幼児の保育と雖も

資料12 物理現象 (自然)

類別	質問数
光	32
音	21
物性	14
熱	13
力・運動	5
磁気	3
計	88

資料11 地象 (自然)

類別	質問数
海	20
地球	13
水	9
川・湖	9
山	8
石・砂・土	8
地震	8
温泉	4
計	79

資料10 気象 (自然)

類別	質問数
雨	41
季節	19
雲	19
雷	19
颱風	13
氷、氷柱	10
風	8
雪	7
霜	4
霧	3
電・霜	3
空	3
計	149

資料9 天象 (自然)

類別	質問数
月	49
星	15
空	15
太陽	12
昼夜	8
四季	4
方位	2
計	110

かかる世の動きから離れた花園の中で行うわけにはいなくなっていると考えなければならない。保育課程において如何にこれに配慮する用意があるかが問題である。

自然に関する質問の分類においては小学校の教育課程等との関連を考え、機械・器具、人体、保健・衛生の項を設けた。保健・衛生を人体に含ませめて考えると質問の多いものは、動物、人体、気象、機械・器具であり、植物、地象(地形、地質、岩石、鉱物を含む)化学現象は少い。これらから幼児は人間あるいは人間に似たもの、動くもの、変化のはげしいものに、より多くの興味をもつと考えられるが、天象中、月に関する質問の多いことも同じ理由からであろう。ことに月の質問は一事物に関する質問としては全質問中最も多く、自然の事象を通じて月のもつ価値、重さなどがこれから考えられよう。一般の保育課程において七夕で星のことをやり、お月見で月のことをやるといった行事的排列や、天体物理学による論理的順序や、星も太陽も月も同じ重さと取扱をするといったことについては一考を要するのではないだろうか。

動物(資料13)においては昆虫に関する質問が最も多く、これに次ぐ哺乳類のものとを合わせると動物の五二%を占めている。

幼稚園において哺乳類の飼育、観察と同様に虫の観察指導が必要である。しかも動物に関しては生態、習性に関する質問が圧倒的に多い(五〇%)これを植物(資料14)に比較すると植物においてはむしろ分類、形態に関する方が多い。動物で分類、形態に関する質問は動物園にいる象、ライオン、キリンなどの珍しい動物に関して

資料 13 動物 (自然)

類別	質問数	生態 習性	分類 形態	生殖(性) 発生・成長	生理	その他	内 容
昆虫類	68 (26.7)	46	5	16	1		セミ, トンボ, 蚊, 蝶 蟻, 蠅, 蜂, 芋虫, 毛 虫等
哺乳類	65 (25.5)	24	24	2	9	6	犬猫, 牛馬, 兎, 羊, 山羊, モグラ等。象, ライオン, 虎, 猿, キ リン等。鯨
鳥類	46 (18.0)	21	8	15	2		鳥, 鶏と卵, 燕, 雀, 鳩等, カナリヤ, 目白, 鶯, フクロウ等
魚類	32(12.5)	14	3	3	11	1	魚, 金魚,
両棲類	17 (6.7)	6	2	8	1		蛙, オ玉杓子
爬虫類	8 (3.1)	5	3				蛇, 龜
軟体動物	7 (2.7)	4	1	1		1	蝸牛, タコ, イカ, 貝, ナメクジ
甲殻類	5 (2.0)	2	2		1		カニ
蜘蛛類	4 (1.6)	4					蜘蛛
円形動物	1 (0.4)	1					ミミズ
動物一般	2 (0.8)	1	1				
計	255	128	49	45	25	8	
(%)	(100)	(50.2)	(19.2)	(17.7)	(9.8)	(3.1)	

資料 14. 植物 (自然)

類別	問数質
分類・形態	36(42.8)
生殖・発生・成長	27(32.1)
生理	13(15.5)
生態	5(6.0)
遺伝・進化	3(3.6)
計	84(100.)

発せられている。また動物に関してはすべてその名称が出て来るのに対し、植物についてはその名称が挙げられているのは三六%しかない。すなわち動物については幼児は形態的判断を一応下していると見られよう。

以上のことから動物に関してはその生態、習性を十分に知るために飼育等による継続観察が必要であり、植物についての質問が極めて少いことからして都市幼稚園においては諸種の植物を栽培し、種子からの成長の過程を観察させたり野外観察の機会をしばしば持つことが絶対に必要であることを改めて強調しなければならない。

機械・器具に関するものは自然に関す

る質問中でも多いものに属するがその中でも汽車、電車、自動車、船などの乗り物に関するものが三〇%を占めている。保育課程中のりのものごっこが多く採り入れられているのは正しいわけであるがこれが社会的立場において取扱われることの多いのに対して、幼児はこれに科学的な探求の芽生をもつて向っているものであり、ここにも食い違いが見られる。のりものについてはもつと統合的取扱が必要ではないであらうか。総じて幼児は現代においては近代文明の所産たる機械・器具に取囲まれて生活し、これに対して自然科学的興味を芽生を抱いているに拘らず従来その芽生を伸ばす配慮が乏しかったのではないであらうか。自然全体に対する幼児の質問が全質問の五九%という高いものであるに拘らず幼稚園における幼児の活動においてこの幼児の自然への興味、関心が十分に満たされていたであらうか。例えば物理現象に関するもので光の屈折、反射についての質問が多いが鏡やその他のものを使って光について学習するための遊びなどもっと工夫されてよいのではないかなどと考えさせられる。

保育課程全体において自然に関する活動は如何に位置づけられるべきであるか、如何なる内容をもつべきであるかなどの問題が改めて考慮せらるべきではないかと思ふものである。

三、むすび

従来教師が漠然と描いてきた幼児の姿と現代に生きることももの実態とは食い違がないだろうか、更に現代においてどのような理想的な子どもの姿を描いて保育すべきであるかということを変更して考え直す態度をもつことが保育課程改造の第一歩であると信ずる。

資料 15 機械・器具
(自然)

類 別	質問数
汽 車 電 車 船 自 動 車	42
ラ ジ オ	24
電 燈 電 気	21
時 計	14
飛 行 機	10
玩 具	10
ミ シ ン	8
映画・テレビ	7
そ の 他	4
計	140

本研究はそれへの一資料たるに過ぎないが従来の研究とともに共通の欠陥としては対象が都市の幼児に限られていることである。幼稚園の都市偏在からして止むを得ないが更に農山漁村において研究がなされたら日本の幼児教育に資することが大であると思う。なお埼玉大附属幼稚園においても継続研究を進められるから今回の不十分な点は今後の研究にまらちたいと思う。

精神薄弱児の言語に 関する考察

名古屋市立保育短期大学

甲 斐 久 生

加賀美 あぐり

棚 橋 節 子

広 松 田 鶴 子

〔要旨〕：幼児の言語や幼児と精神薄弱児の言語の比較に関する研